

資料紹介

郵政資料館所蔵の中世東大寺文書と往来軸

田良島 哲

一 調査の経緯

郵政資料館が所蔵する歴史資料の中には、時折思いがけないものが含まれていて、コレクションの奥深さをうかがうことができる。ここにとりあげる中世文書も、二〇〇八年に郵政資料館所蔵資料の評価のため同館を訪問した折に、井上卓朗氏からその存在についてご教示をいただいたものである。史料の概要については、井上氏もすでに紹介されているが⁽¹⁾、その後多少の知見が得られたので、ここに報告させていただく。

筆者が最初に実見した際には、文書はかなり損傷した状態で往来軸に巻き付けられていた。後述するように往来軸の実例は珍しく、開いてみたところ文書自体も一見して平安時代の原文書で、東大寺関係のものだと判断された。そこで古文書として史料的价值が高いので、保存に万全を期されるようをお願いした。その後、資料館の適切なご判断で、二〇〇九年度に保存修理が施され、面目を一新したことは喜ばしい。

関連史料を確認した結果、文書と往来軸の間に、直接の関係はないことが判明したので、以下、文書と往来軸について、それぞれ判明したことを述べたい。

二 天永元年十一月十五日 僧賢算田地売券

〔寸法〕

縦二九・三センチメートル 横四九・六センチメートル 一紙

〔本文〕

謹解 申売買田事

之内壹段沽却了

合参段者

在東大寺川上御庄内
字山小田南辺者

四至

限東横道 限南又道
限西溝 限北類地

右件田、賢算相伝領掌無他妨、
而依有要用、限直米拾参斛、
伍斗、紀乙先生永所売渡也、
但依有類地、於本文書者不
副渡之状、如件、

天永元年十一月十五日

売人僧 (花押)
買人紀

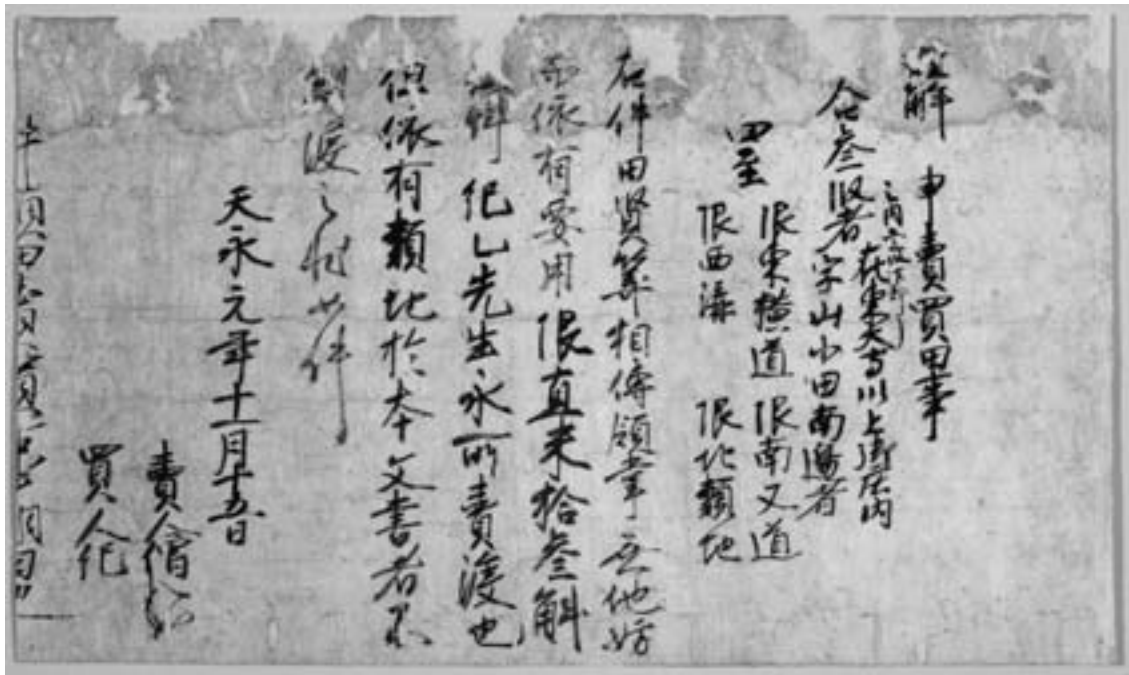


図1 天永元年11月15日 僧賢算田地売券 (表)

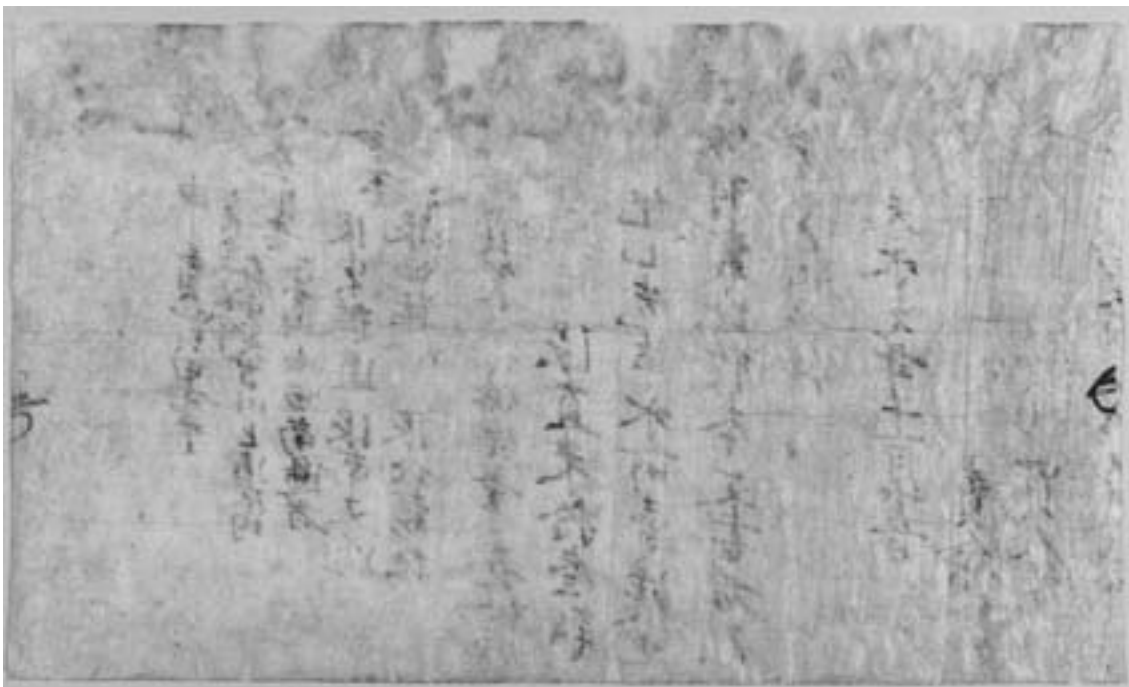


図2 天永元年11月15日 僧賢算田地売券 (裏)

(紙継目)

(件領田売買実正明白也^カ)

□□□□□□□□□□□□□□□□

※袖裏及び奥裏の紙継目に花押あり。

(翻字はおおむね現行通用の字体とした。)

この文書(図1)は「売券」すなわち売買の事実を証明して、売主から買主へ交付される文書であり、本文書の場合、天永元年(一一一〇)に「僧賢算」から「紀乙先生」へ田地が売り渡されたのである。紙継目裏に花押を据えて文書の抜き取りを防ぐ措置を講じていることから判断して(図2)、本来は権利の継承関係を証明するために複数の文書を貼り継いだ「連券」「手継証文」と呼ばれる形になっていたことが知られる。

中世の売券は「売渡申…」と書き出すものが多いが、この文書は「謹解」で書き出している。「解」は古代では上申文書に用いられる様式で、「謹解」で書き出すのは売買自体が申請行為であったことの名残りを示す比較的古い形式である。

「川上庄」は河上庄と表記されることもあるが、大和国添上郡に所在した東大寺領莊園の一つで、名は佐保川の上流であることに由来すると言われる。現在でも奈良市北部に川上町の字名が残り、中世では奈良の町から京都へ向かう街道である奈良坂の近辺にあたる。関連史料は平安時代中期

から東大寺文書に見え、多くはすでに『大日本古文書』や『平安遺文』に翻刻されている。史料上の初見は康平五年(一一〇六二)であるから、本文書は比較的古い史料と言えよう。

川上庄は中世東大寺の膝下庄園の一つとして、古くは清水三男氏の先駆的な研究があり、第二次大戦後では泉谷康夫氏や伊藤鋭彦氏がとりあげている²⁾。「川上庄」という名を持つてはいるが、一円的な支配領域ではなく、個別の寄進による断片的な田地の集合体であったことは、先行研究の共通して指摘するところである。この売券も平安時代に東大寺領として集積された田地の一つであろう。残念ながら、現段階では東大寺等が所蔵する原史料の状況を調査するいとまがなく、接続する連券に含まれる他の文書を確認することはできなかった。この点については後考を期したい。

三 往来軸

往来軸は題箋軸あるいは立籤とも呼ばれ、卷子の軸の上部に見出しとして文書の表題や日付を書き込めるような題箋を付したものである。題箋部は平たい板状のものと、四面に記載が可能な駒形のものがある。正倉院文書の中には文書を貼り付けた当初の状態が残ったものがある³⁾。郵政資料館では、この往来軸に前述の売券を巻きつけた状態で保存されてきたが、両方の史料は、東大寺旧蔵であるという以外に直接の関係はない。往来軸は伝存例の他に、遺跡からの出土例も見られるが⁴⁾、全体として遺存は

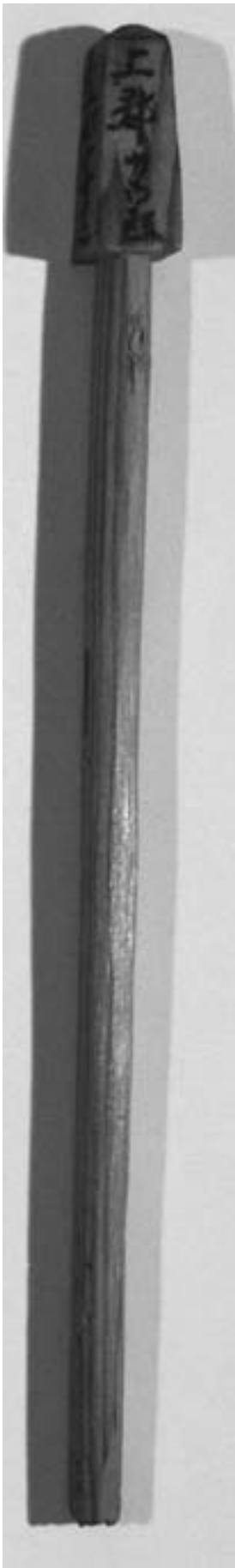


図3 題箋 全体

少なく、実物史料として貴重である。今回確認した往来軸の概要は、以下のとおりである。現状は図3および図4に示した。

〔寸法〕

全長 三五・八センチメートル 軸径一・三センチメートル 題箋部長さ
五・五センチメートル 題箋部上幅一・八センチメートル 題箋部下幅二・
二センチメートル

〔本文〕

- (第一面) 「大和国添」
- (第二面) 「上郡カウ殿」
- (第三面) 「耆町寄進」
- (第四面) 「状宇都宮入道」

この往来軸に対応する文書であるが、寄進者の名前と田地の面積から判断して、「東大寺文書(成卷文書)」に収める左記の建長二年(一二五〇)二月十五日沙門蓮生(宇都宮頼綱)田地寄進状(鎌倉遺文)一〇一七(一六三号)が関係するのではないかと思われる。

〔端裏書〕 □□宇都宮入道□□□進状

寄進 大和国水田耆町者
在管四至坪付所出等、別紙載之
右件田、南都東大寺大仏脇土觀世音菩薩
毎夜不退燈明用途料、限永代令寄進□、
此尊者祖父禪門重阿弥陀仏所奉造
立之像也、仍彼焚魂為令得無垢清淨之
光、兼蓮生為令結花台迎接之縁、寄進
如件、
建長二年二月十五日

沙門(花押)



(第1面) (第2面)



(第3面) (第4面)

図4 題箋 本文

寄進者である宇都宮頼綱は、下野宇都宮に本拠を構えた鎌倉時代前期の有力御家人の一人であるとともに、歌人としても名を知られる。寄進状に言及されている「祖父禪門重阿弥陀仏」は宇都宮朝綱で、東大寺再建に当たって源頼朝から大仏の脇侍觀音菩薩像の造立を任されたことが知られている。五十年後に孫の頼綱がその後生における往生を祈って仏前の燈明料として東大寺に田地を寄進したのである。したがって、この往来軸は鎌倉時代に作成された新たな伝存例として評価されるものである。

四 伝来をめぐって

大正六年(一九一七)頃の刊行と見られる通信博物館『陳列品目録』⁽⁵⁾の中に「往来軸 一個 田山宗堯氏出品」という記載がある。田山宗堯(たやま むねとう)は明治から大正にかけて東京市日本橋区数寄屋橋にあった書籍商・出版社「警眼社」の社主で、その名の示すとおり警察行政関係の書籍や雑誌を多く編集発行していた⁽⁶⁾。

一方、東京大学史料編纂所が所蔵する影写本の中に、大正六年に「東京市京橋区数寄屋橋」在住の田山宗堯所蔵の文書十三点を影写した「田山文書」が伝わる。この文書はその後天理大学附属天理図書館の所蔵に帰しているが⁽⁷⁾、その内容はいづれも奈良の春日若宮の神主を務めた千鳥家に関するもので、田山宗堯が奈良から出た古物を手に入れた事実が判明す

る。この往来軸は「出品」とされているところから、この当時は寄託されていたのであろうが、一つの館で、古い往来軸がいくつも持ち込まれるとは想定しにくいので、田山所蔵の往来軸が通信博物館（郵政資料館）の所蔵になったと見るのが妥当である。東大寺文書は、巷間で分蔵されているものが多く、この二種の史料もそういった一例と言えよう。

〔謝辞〕 調査の機会を与えられ、修理後写真の提供をいただいた郵政資料館に記して感謝申し上げます。

- 1 註
井上卓朗「新たに発見された東大寺文書」〔『郵便史研究』第二十七号二〇〇九年三月〕。
- 2 清水三男「東大寺領大和国添上郡河上荘」〔『日本中世の村落』一九四三年〕、泉谷康夫「東大寺領大和国河上庄の構造」〔赤松俊秀教授退官記念事業会編『国史論集』一九七二年〕、鈴木鋭彦「東大寺領大和国河上荘の売券」〔『愛知学院大学論叢（一般教育研究）』十一、一九六五年〕など。
- 3 〔刊行物紹介 正倉院文書目録 三 続修後集〕〔『東京大学史料編纂所報』第二十九号、一九九四年〕。
- 4 国立歴史民俗博物館編『古代日本 文字のある風景』二〇〇二年。
国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」を参照した。刊行年の推定は同館所蔵本の受け入れ印の日付による。
- 5 東京書籍商組合編『東京書籍商組合史及組合員概歴』一九一二年。なお、田山の履歴については下記の考察がある。吉原敏彦「警眼社社主田山宗堯とは誰ぞ」、<http://home.hiroshima-u.ac.jp/katyoshi/kayama.pdf>
- 6 藤原重雄『大日本史料』第三編関係史料の収集・校正および春日大社関係散逸史料の調査」〔『東京大学史料編纂所報』第三十六号、二〇〇一年〕。
- 7

（たらしま さとし 東京国立博物館 学芸研究部 室長）